

## 1 平成18年度小教研道德部会研究主題

# 自己を見つめ、心豊かに生きる子どもを育てる道德教育

## 2 研究主題の趣旨

### (1) 研究主題設定の背景

本研究主題は、よりよい生き方を一層主体的に求める子どもを育てていくことを意図している。すなわち、子どもが自分のよさや可能性を信じ、自己課題\*<sub>1</sub>をもって自己実現\*<sub>2</sub>を目指しながらよりよい生き方を求めていくこと、子どもが道德的価値の自覚を深めて実践することを重視するものである。

平成17年中教審答申においては、「子どもたち一人一人が、人格の完成を目指し、個人として自立し、それぞれの個性を伸ばし、その可能性を開花させること、そして、どのような道に進んでも、自らの人生を幸せに送ることができる基礎を培うことは、義務教育の重要な役割である」とされ、心豊かにたくましく生き抜いていく基盤となる力を育成することが不可欠とされている。しかしながら、家庭や地域の教育機能の低下、社会体験や自然体験の減少、社会全体のモラルの低下などのために、豊かな人間性をはぐくんでいくことが困難になってきているのが教育の現状である。青少年の規範意識の低下、非行や犯罪の増加も懸念され、生命を大切にすることを強く求められているところでもある。豊かな心をはぐくみ、道德的実践を充実させることがなお一層、望まれているといえる。

本主題は平成17年度に設定されたものであり、昨年度は板野郡を中心に研究が進められ、北島北小学校においては第20回四国小・中学校道德教育研究大会徳島大会(小学校)、兼徳島県小学校道德教育研究大会が行われた。本大会では、道德の時間と体験や各教科等との関連を図りながら子どもの意識の流れを十分に見通した構想がなされており、子どもが自己評価を重ねながら主体的に道德学習を進め、心豊かに生きる姿を見ることができた。この成果をふまえて、子どもが自己課題をもち、自己との対話を重ねながら道德的実践に取り組んでいくことができるよう、さらに研究を深めていきたい。

### (2) 研究主題について

#### 「心豊かに生きる」とは

ここでは、「心豊かに生きる」とは「自分を大切に、他と共生しながら自己実現を目指して生きること」と考えている。

わたしたちは、自分の心を偽って自分をおとしめる行いをすれば心に痛みを感じるし、自分の願う生き方をすれば喜びを感じる。また、まわりの人を思いやって心が通い合ったとき、自然や芸術に感動したとき、誰かの役に立つことができたときなどには、自らの心が温かくなり、満たされるのを感じる。人間は「自分自身」、まわりの人や自然などの「他」を尊重し、共生していききたいという思いを持っているのである。

この、自他を尊重し、共生していききたいという思いがしっかりと心の中にあるとき、その人の心は豊かであるといえよう。そして、その思いは単に心の中の思いにとどまっているのではなく、積極的に行動として表されたり、無意識のうちに行動となって表れたりしてくるであろう。自分のよさを発揮し、自己実現を目指して生きる中で、その人のもつ豊かな心が行動となって表れてくるのであり、より豊かな心をはぐくむべく生きていくことがその人の自己実現へとつながっていくのである。

#### どうして「自己を見つめる」なのか

よりよい生き方をしようとするならば、わたしたちは自分自身のことをふり返り、自分の生き方へと反映させていかなくてはならない。自分自身をふり返ることによって、これからの自分の生き方を見通すことができ、心豊かに生きることもできるのである。

人間は、「心豊かに生きたい」という願いを持っている。その願いは意識の下に隠れていたり、漠然としたものであったりすることも多い。しかし、何かの契機によって「自分の生き方をさらによいものにしたい」と意識することがある。この意識が、自他とのかかわりにおいて「どのような生き方が大切なのか」「どのように生きればよいのか」という問いかけへと発展することで、自己との対話が始まる。問いかけが深ければ深いほどに、人は自分自身と向き合い、どのように生きることが大切なのかと考える。それは今までの自分の価値観を確かめたり見直したりしながら自分自身をふり返っているのであり、自己を見つめている姿である。このようにすることによって、人は未来に夢と希望をもって自分なりの自己像を描き、自己課題をもって心豊かに生きることもできるのである。

道德教育において、心豊かに生きる子どもを育てるためには、子ども自身が「自分の生き方をさらによいものにしたい」と意識して自己を見つめるように導くことが大切である。そのかなめとなる道德の時間を中心とした指導の在り方について、次の点を十分にふまえておきたい。

まず、子どもが「自己の生き方をさらによいものにしたい」という思いがもてるようにすることが大切である。偶然に頼っていたのでは、その思いをもつことは難しい。人はかかわりの中で生きている。自他とのかかわりの中から子どもが自己を見つめる契機となることを仕組み、あるいは子どもがあまり意識していない事柄に注目させることによって自己課題をもつことができるようにするのである。

また、道徳の時間には、それぞれが自己との対話を深めることができるよう十分に留意したい。そのことを通して、道徳的価値の自覚を深め、より心豊かな生き方へと導くようにするのである。これまでの自分自身をじっくりと見つめ直すことで、心豊かに生きる意欲を高めて自己課題をもたせたり、新たな自己課題に気付かせたりすることができ、実践への意欲を高めることもできるであろう。

さらに、道徳の時間にもった自己課題を追求することができるよう支援を行いたい。道徳の時間に学習したことは、実践を通してより確かなものとなったり、新たな自己課題となって発展したりする。道徳的実践のための場を設定したり、一人一人がそれぞれに道徳的実践に取り組んでいくことができるための支援を行いたい。また、道徳的実践を通して、心豊かな生き方のよさや心豊かに生きる自分のよさに改めて気付いたり、新たな自己課題をもったりできるよう、実践についての自己評価も大切にしたい。

### 3 研究内容と留意点

#### (1) 子どもが主体的に取り組む道徳学習の構想

- ・日常的な体験や体験活動を道徳学習に生かす構想の工夫
- ・子どもの自己課題を大切にした総合単元的な道徳学習の構想
- ・「心のノート」を位置付けた学習計画の在り方

この研究内容について深めるには、子どもの意識を予想しながら、道徳の時間の学習と、各教科等での学習や日常的な体験が有機的に関連するように構想することが大切である。

総合単元的な道徳学習は本主題に迫るための有効な方法である。総合単元的な道徳学習においては、学習の過程で子どもがもつ意識を予想して、子どもが意識をつなげていくことができるように単元を構想したり、複数の道徳の時間を通して子どもの思いや考えが深まり広がるように構想したりするための工夫が求められる。

#### (2) 自己への問いかけを深め、道徳的価値の自覚を図る道徳の時間の在り方

- ・子どもの悩みや心の揺れなどをとらえた道徳の時間の在り方
- ・子どもの体験を生かした指導方法の工夫
- ・心豊かな生き方への自信を深めたり、新たな自己課題へと発展させたりするための工夫
- ・道徳的価値の自覚を深める「心のノート」の活用

本主題の求める道徳の授業は、子どもが主体的によりよい生き方を追求していく授業である。したがって、道徳の時間に学習する事柄が、「自分にとって大切なことである」「考えを深めていこう」ととらえられるようにすることが重要である。その上で、子ども自身が自己との対話を行いながら学習を進める中で自分自身を深く見つめ、道徳的価値の自覚を深めるようにしていきたい。

そのようにすることで、子どもは自己課題をもち心豊かに生きようとして実践することになる。その道徳的実践を通して心豊かに生きることも実現していく。子どもが自己課題にそって道徳的実践ができるための工夫も忘れないようにしていきたい。

#### (3) 自己を見つめることができる資料の開発・活用

- ・子どもにとって切実性があったり、課題をもつことができたり、強く心を揺り動かされたりする資料の開発・活用
- ・子どものさまざまな体験、教師の体験や願い、地域の文化や特性、保護者や地域の人々の生き方や願いなどを素材とした、子どもの心に響く資料の開発・活用
- ・多様な視聴覚教材や情報通信ネットワークなどを利用した資料の開発・活用

道徳の時間において、子どもが自己を見つめ心豊かな生き方へとつなげていくことができるように学習を深めるためには、どのような資料を用いるかが非常に重要である。子どもの自己課題にそっている、深く共感できるなど、子どもの心に響く資料を取り上げるようにしたい。そのためには既存の資料を取り上げるだけでなく、多様な素材に目を向け、表現方法を工夫することも視野に入れながら新しく資料を開発し、効果的に活用して授業を展開することも重要である。

#### (4) 「豊かな体験」を道徳の時間に生かす工夫

- ・体験をより豊かなものとして意識させ、道徳の時間に生かす工夫
- ・体験から自己への問いかけや自己との対話を導く実践
- ・「心のノート」を活用して、体験を道徳の時間に生かす工夫

わたしたちは生活の中でさまざまな体験をする。その中にはわたしたちの心に響くものがある。道徳的判断を迫ったり、人間としての在り方や生き方を投げかけたり、道徳的心情を揺さぶって感動させるものがある。それらは、わたしたちの

心に自己との対話を呼び起こす体験である。こうした体験を、ここでは「豊かな体験」と考えたい。したがって、学校や地域での体験活動ばかりが子どもにとって「豊かな体験」であるとは限らない。日常の何げない体験が「豊かな体験」となることもある。

道徳の時間の学習との関連を図るとき、子どもが日頃無意識に行っている体験も、自己との対話が生まれるように工夫することで豊かな体験となろう。また、そこから子どもの自己課題へと発展させることもできるであろう。

## (5)心豊かに生きる子どもを育てる評価の在り方

・子どもが自ら心豊かに生きようとするための自己評価の在り方

・子どもの体験を通しての思い、道徳的価値の自覚、自己課題などをとらえ、道徳学習の指導法や道徳の時間の構想の改善に生かす工夫

・指導法や指導計画等を評価し、その改善に生かす工夫

自己を見つめることはまさに自己評価である。その内容がいつも表現されるわけではないが、自己評価なくして本主題に迫ることはできない。今までの自分の生き方や考え方を見つめ、これから自分の求めようとする生き方を考えたり、自分の学び方について確かめたりしていくことを通して、子どもは自己を見つめる目を確かなものとしていく。したがって、評価カードを工夫して継続的に自己評価ができるようにするなど、自己評価を効果的に学習の中に位置付けていくことは有効な支援となる。

また、子どもの道徳性をとらえ、子どもの学びを個に即して継続的に評価することで、学習計画や道徳の時間の指導が改善され、一人一人の学びに応じた支援を行うことができる。

なお、教師の指導の在り方を検討し改善するための指導法や指導計画等の評価方法についても積極的に研究を進めたい。

## (6)家庭・地域社会と連携したり、校内で協力したりして道徳教育を進める工夫

・家庭・地域社会と連携を進め、心豊かに生きる子どもをはぐくむ工夫

・家庭・地域社会と連携を深める「心のノート」の活用の在り方

・校内で協力して心豊かに生きる子どもを育てる実践

家庭や地域社会との連携を進めることによって、学校における道徳学習への理解が深まり、指導効果が高まったり、子どもの体験や実践を充実させたりすることが期待できる。家庭や地域社会においても心豊かに生きることができるよう、連携を図っていききたい。また、校内の職員が担任教師と協力して指導したり、励ましを与えたりするなどのかわりによって、より大きな効果を上げることができよう。

---

\* 1自己課題・・・道徳的価値に基づいて自らの理想や目指す自分像を実現させようとして設定するめあて。学習の初期においては漠然としたものであることも多いが、学習が進むにつれて、具体的で明確なものとなってくる。

\* 2自己実現・・・「他」と調和しながら自分のよさや可能性を発揮して、自分の願いを実現していくこと。